

新設学部における初年次教育の試み： 学生の成長実感の質的分析

奥野 真由¹⁾・浦上 萌^{2),3)}・大橋 充典¹⁾・秦 佳江²⁾・
行實 鉄平¹⁾・野田 耕¹⁾

久留米大学人間健康学部では、初年次教育の一環として「演習 IA」が開講されている。本研究の目的は、演習 IA での学びが、学生にとってどのような経験となっているかを明らかにし、初年次教育システムを再考するための指標を得ることとした。調査は演習 IA を受講した140名を対象とし、質問紙を用いた集合調査法にて実施した。自由記述で得られたデータを KJ 法の手続きを参考に分析し、学生が実感している成長の内容を概念化した。その結果、知識や技術の向上と大学生活への適応に支えられ、自分自身の変化や成長を実感していることが明らかとなった。しかし、授業目標として掲げられている「主体的な学び」に関するカテゴリーは生成されなかった。今後は、学生の学生エンゲージメントの意識を高めるための授業づくりや、学生の主体的な学びを育てる空間の創出が、本学部の初年次教育システムを構築する上で必要であると考えられる。

キーワード：大学教育、間接評価、KJ 法

A case study of first-year experience in newly established faculty: Qualitative analysis about students' growth

Mayu OKUNO, Moe URAGAMI, Mitsunori OHHASHI, Kae HATA,
Teppei YUKIZANE, and Koh NODA

はじめに

初年次教育は、1970年代後半からアメリカの高等教育機関において導入され、日本では2000年代から広まりをみせている教育プログラムである。文部科学省高等教育局（2017）は初年次教育を、「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム」とし、「高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」と説明している。平成27年度に実施した調査によると、769大学中721大学（97%）が初年次教育を導入している。その取り組み例として、「レポート・論文の書き方等の文章作法」「プレゼンテーション等の口頭発表技法」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」「学生生活における時間管理や学習習慣の身に付け」などが報告されている（文部科学省高等教育局，2017）。

1) 久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科
2) 久留米大学人間健康学部総合子ども学科
3) 現職) 相山女学園大学人間関係学部心理学科

久留米大学人間健康学部（以下、本学部とする）では、初年次教育の一環として「演習 IA」が1年生の前期に必修科目として開講されており（表1）、クラスは教員1名に対し学生10名程度で構成される。演習 IA では到達目標として次の2点を掲げている。

- ① 大学生活を共にする仲間を見つけ、人間健康学部の学生として望ましい生活・学習態度を理解できる。
- ② 研究・レポートの作成に必要な文献・情報の検索技術を身につけ、自ら主体的に調査し、考え、問うことができる。

本学部は、「人間の理解と健康の探求をとおして、すべての人の生活を支え、地域に貢献できる実践的人材の育成」を理念とし、2学科で構成されている。保育や幼児教育学をはじめ、さまざまな研究領域から子どもについて総合的に学ぶ「総合子ども学科」と、からだ・健康・スポーツや運動を自然科学分野や人文科学分野などの広い視点から学修する「スポーツ医科学科」である。両学科の特色ある授業を相互に学べるカリキュラムが設定されており、学生が本学部での学びをとおして包括的知識や能力を身につけ、独自の専門性を獲得することが期待されている。演習 IA は、大学での学びの導入として重要な役割を担った科目であることに加え、学科混合クラス制を採用し、両学科の教員がクラスを担当するなど、本学部の特色が反映された科目の一つである。

本研究では、以上のような目標と背景のもと行われた演習 IA での学びが、学生にとってどのような経験となっているかを明らかにし、本学部の初年次教育デザインを再考するための指標を得ることを目的とした。そこで、学生を対象に学びへの態度やどのように伸びたかを自己評価する形式の質問紙調査を実施した。学生自身に答えさせる間接評価は、評価のための客観的指標としての使いにくさはあるが、学生がその時点でどう考えているのかを把握することは、教育改善の方向性を検討するためには大いに役立つ（山田、2016）ことが期待される。

表1 演習 IA の授業内容

内 容	
第1回	オリエンテーション、人間健康学部で学ぶとは
第2回	コミュニケーションの基本 (1) 自分を知ってもらう
第3回	コミュニケーションの基本 (2) お互いを知る
第4回	大学を活用するために (1) 施設の見学と施設利用
第5回	大学を活用するために (2) 図書館ツアーと図書館利用の方法について
第6回	情報検索・文献検索の方法と情報リテラシーについて
第7回	大学生の学生生活について
第8回	自分の将来を考える
第9回	プレゼンテーションとは (1)
第10回	プレゼンテーションとは (2)
第11回	聞き方の基本 (1) ノートのとり方
第12回	聞き方の基本 (2) 質問の仕方
第13回	読み方の基本 (1) 要約の仕方
第14回	読み方の基本 (2) 内容の発表・ディスカッション
第15回	演習のまとめ

「平成29年度 学修シラバスブック <人間健康学部>」参考

方 法

1. 調査対象者および調査方法

調査対象者は演習 IA を受講した140名であった（有効解答率97.8%，男70名，女性67名）。なお、調査対象者の所属学科による人数内訳は、総合子ども学科52名、スポーツ医科学科85名であった。本調査は2017年7月、演習 IA の最終回の講義時間中に、質問紙を用いた集合調査法にて実施した。本研究の実施については、久留米大学倫理審査委員会より承認を得た。

2. 調査内容

①基本的属性（性別，所属学科，演習 IA 担当教員），②役立った単元について（7段階評価），③できるようになったことについて（5段階評価），④成長の実感について（自由記述），⑤印象に残っていることについて（自由記述），それぞれ回答を求めた。

今回は、「④成長の実感について」で得られた回答を分析対象とする。

3. 分析方法

自由記述で得られた回答を川喜田（1967）の KJ 法の手続きを参考に、演習 IA の受講を通じて学生が実感している成長の内容を概念化した。KJ 法は、一見まとめようもない複数多様な情報やデータを、個人の思考だけではなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、これを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である。KJ 法は、研究者の仮説に沿ったデータの恣意的選択を防ぎ、データからボトムアップで学ぶために役立つことが指摘されている（やまだほか，2012）。本研究では次の手順で分析を行った。

1) 複数の専門領域研究者による内容の熟読

「演習 IA 全体をとおして、あなたが自分で成長したと思うことを具体的に書いてください」という指示に対し、調査対象者が書いた337の記述を内容に注意しながら、スポーツ科学系、社会福祉学系、心理学系の研究者の計6名で熟読した。なお、本研究では、いずれのカテゴリーにも含まれなかった回答は分析から除外した。

2) グルーピング

記述の類似性や差異性に着目しながら意味の類似した記述をまとめ、具体的な内容を示す低次のカテゴリーを生成し、類似した低次のカテゴリーをまとめて、より抽象的な高次のカテゴリーを生成した。本研究では、最終的に最も抽象度が高い高次カテゴリーを“大カテゴリー”とし、その下位に位置する低次のカテゴリーを“中カテゴリー”，さらに中カテゴリーを構成する最も具体性の高い項目を“小カテゴリー”とした。

3) 分析の質の保証

本研究では、解釈の信頼性と妥当性を確保するために、専門領域の異なる複数の研究者によって分析を行った。このことにより分析の視点を輻輳化し、研究者間で解釈が異なった場合は、解釈が収束する点を検討した。そして、概念の整合性、さらに各カテゴリーの内容について6名の解釈が一致するまで議論した。また、分析に関わった研究者のうち4名は演習 IA の担当教員でもあり、そのような立場が分析を行う際に調査対象者の共感や解釈に影響を与えている。

結果および考察

337の記述から内容の類似性が高いものをグルーピングした結果、36の小カテゴリーに分類された。小カテゴリーには、それぞれ内容を適切に表すグループ名を付けた。名付けられたグループ名から、カリキュラム内容に則した12の中カテゴリーを生成した。さらに、初年次教育で養われることが期待される事柄をもとに4つの大カテゴリーを生成した（表2）。

以下に、カテゴリー間のつながりについて示した後、演習IAでの学びが学生にとってどのような経験となっているかについて考察する。文中では小カテゴリーは〈 〉、中カテゴリーは「 」, 大カテゴリーは【 】内にそれぞれ表記する。

表2 カテゴリー一覧

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
関係性の構築	久留米大学	・行動力
		・汎用的な力
	コミュニケーション	・大学について
		・施設場所の把握
	対人関係	・コミュニケーションの取り方
		・コミュニケーションを取った
		・友人関係の構築
	会話	・教員との関係構築
		・初対面の人との会話
		・他学科の人との会話
プレゼンテーション	形式的な発表	・いろいろな人との会話
		・発表の方法が理解できた
	形式のない (カジュアルな)発表	・発表の方法の理解が深まった
		・発表ができた
情報を扱う力	収集	・数分間の発表
		・自己紹介ができた
	整理	・人前で話すこと全般
		・図書館利用
		・情報収集の仕方
	伝達	・ノートの取り方
		・要約の仕方
		・文章にまとめる
自己変容	克服	・レポートの書き方
		・パワーポイント(資料)の作成
	大学生生活への適応	・自分の意見を言う
		・話を聞く
	キャリアデザイン	・質問の仕方
		・自分の考えを持つ
	・緊張の軽減	
	・人見知りの軽減	
	・発表に慣れた	
	・人前で話すことへの自信	
	・学習管理	
	・生活管理	
	・自分の将来について考える	
	・自分の将来に関する計画	

1. 成長実感に関するカテゴリー間のつながり

演習 IA は1年生前期に設定されている科目であることから、当初は見知らぬ者同士も多かったと思われる。しかし、授業を通して〈初対面の人との会話〉、〈いろいろな人との会話〉、〈他学科の人との会話〉といった交流の機会があり、そこでは数多くの「会話」が繰り返された。加えて学生は〈コミュニケーションの取り方〉に関する単元を通して、仲間と〈コミュニケーションを取った〉ことで、クラス内での「コミュニケーション」がさらに活発になったと考えられる。そういった体験が〈友人関係の構築〉や〈教員との関係構築〉など「対人関係」の構築にも影響を及ぼすと推察される。活発な会話やコミュニケーション、新たな対人関係が構築できたことで、自身の成長を実感していると考えられ、【関係性の構築】という大カテゴリーが生成された。

次に、演習 IA では大学での学習に必要なスタディスキルの一つとして、プレゼンテーション能力を養成することを目的とした単元が設定されていた。授業での知識の享受（〈発表方法が理解できた〉、〈発表方法の理解が深まった〉）や、〈発表することができた〉という体験など、「形式的な発表」の知識やスキル向上が成長実感に繋がったと考えられる。また、〈数分間の発表〉や〈自己紹介ができた〉といった〈人前で話すこと全般〉に関する広い経験が「形式的ない（カジュアルな）発表」の能力向上を実感させたことが伺え、【プレゼンテーション】という大カテゴリーが生成された。

その他にも、文献検索の方法や、文章の読み書き、思考の技法の養成を目的とした単元も設定されていた。学生は、〈図書館の利用〉に関するレクチャーを受け、〈情報収集の仕方〉を学ぶことで、必要な文献や情報を「収集」できるようになった。そして、収集した文献や情報を〈文章にまとめる〉方法や、〈要約の仕方〉、〈パワーポイント（資料）の作成〉について、実践を通して体験した。また、大学授業を受講する際の基本スキルである〈ノートの取り方〉や〈レポートの書き方〉についても学習した。総じて、収集した文献や情報を「整理」する力を身に付けた。その他にも、演習 IA ではディスカッションの機会が設けられており、教員や仲間の〈話を聞く〉ことを通して〈自分の考えを持つ〉こと、そこから出てきた疑問は適切な〈質問の仕方〉をもって質問し、〈自分の意見を言う〉ことを体験した。このような実際の体験を通じて「伝達」する力が養われたと考えられる。よって、必要な情報を収集し、それらを伝達するスキルの向上が成長実感に繋がっていることが推察され、【情報を扱う力】という大カテゴリーが生成された。

高校教育とは異なり主体的に学びの機会を選択し、スケジュールを立て行動しなければならない大学生活において、〈学習管理〉や〈生活管理〉ができたことは「大学生活への適応」ができていた実感をもたらしたと考えられる。加えて、〈緊張の軽減〉、〈人見知りの軽減〉、〈発表に慣れた〉、〈人前で話すことへの自信〉など、苦手を「克服」する機会としても演習 IA は有益であったと推察される。また、〈自分の将来について考える〉ことや〈自分の将来に関する計画〉を立てることなど「キャリアデザイン」を考えることは、他の授業にはない機会であった。取り組む姿勢の変化や、苦手の克服、将来について考えた経験は、学生にとって自分自身の新たな側面に気づいた経験であったと捉え、【自己変容】という大カテゴリーが生成された。

〈施設場所の把握〉ができたことや、大学の歴史など〈大学について〉の理解が深まったことなど「久留米大学」自体に関する中カテゴリーと、〈行動力〉や〈汎用的な力〉に関する小カテゴリーは、分析の結果、大カテゴリーには含めないこととした。

2. 成長実感モデルの作成

分類整理の結果にもとづいて、大カテゴリー間のつながりを図解化した(図1)。初年次教育による学生の成長モデルを作成する試みであり、仮説生成として図解化をおこなった。解釈の偏りを最小にするため、本研究で検討を重ねながら図解化を進めた。

演習 IA の到達目標と照らし合わせると、“大学生活を共にする仲間を見つける”は【関係性の構築】のカテゴリーに、“望ましい生活・学習態度を理解できる”“文献・情報の検索技術を身につける”“調査し、考え、問うことができる”は【情報を扱う力】【プレゼンテーション】のカテゴリーに、それぞれ反映されていると考えられる。そしてこれらのカテゴリーは、相互に影響しあうことで成長が促進していると解釈できる。例えば、【情報を扱う力】として質疑応答についての知識を身につけたことで、より質の高い【プレゼンテーション】が可能となる。その経験が、自分の考えを持つきっかけ(【情報を扱う力】)となっている。このような解釈から、それにもとづき、図解には双方向の矢印を加えた。大学での学びに必要とされる知識や技術の向上と大学生活への適応に支えられ、学生は“自分自身が成長している”ことを実感していると解釈し、【自己変容】のカテゴリーを位置づけた。

今後の課題

学習成果を規定する要因として「学生の主体的な関わり」は重要である(小方, 2008)。本学部の演習 IA においても、学生の学びの主体性を育むことが到達目標として掲げられていたが、本調査では主体的な学びに関する成長実感のカテゴリーは生成されなかった。その点をふまえ、先行研究を参考に、本学部の初年次教育の課題を述べる。

山田(2018)は、成果(アウトカム)に過度に依存するのではなく、教育・学習の過程(プロセス)を重視する必要性が指摘されてきていることを報告し、「我々(大学教員)が本来目を向けるべき対象は、学生の学びへの関与(学生エンゲージメント)なのである」と述べている。学生エンゲージメント(student engagement)は、アメリカの教育学者 George Kuh が2000年頃に提唱し、アメリカを中心に用いられるようになった(Kuh, 2001)。学生エンゲージメントは、「教員が一方向的に教育を提唱するのではなく、学生が主体的・積極的に学びに関わる中で、教員と学生が信頼関係を築き、大学への帰属意識も高めていく。その過程で学生が成長するとともに、教員も教育力を高め、大学教育の改善も進む。そうした、個人と個人、個人と組織が一体となって、お互いの成長に貢献し合えるような関係性を表している(山田, 2016)」。「主体的な学び」という言葉は教育場面などでし

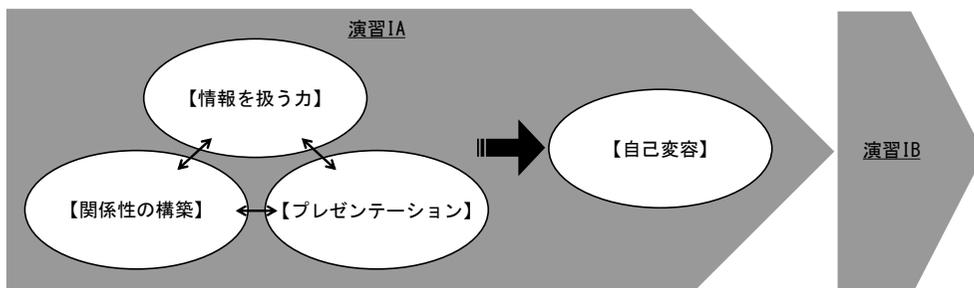


図1 初年次教育による学生の成長実感モデル

ばしば用いられるが、具体的に指すものがわかりづらく、教員間や教員と学生間で認識を揃えることが難しい。そこで、この学生エンゲージメントの概念を用いて本学部の初年次教育デザインを再考することは、有益であると考えられる。現在行われている演習 IA は、教員が一方向的に教育するような形式ではなく、グループワークやディスカッション形式も多く取り入れられており、これらの授業形式に参加するためには“学生が主体的・積極的に学びに関わる”ことがあるはずだが、調査における学生の回答には含まれなかった。よって学生の学生エンゲージメントの意識を高めるために、教員が学生に対して主体的に参加することを明示し、個人が主体的に参加した結果、組織（演習クラス）がどのように成長していくのかを体感させるような授業づくりが必要になると考えられる。

また山田（2018）は、この学生エンゲージメントを高める教育実践として「教員と学生、学生同士に一定の信頼（reliability）があり、学生は知を核とした協働（collaboration）を通じて、現実感（reality）のある課題と向き合い、その中で責任（responsibility）ある行動をとり、それら一連の学びを省察（reflection）する。学生エンゲージメントを高めるためには、整備された無機質な制度や環境でも、巧みな話術や技法でもなく、上記のような空間（engaged space）をいかに創出できるかであろう」と提言している。したがって、今後、演習 IA が、学生の主体的な学びを育てる空間の一つとして機能するよう、さらに工夫することが望まれる。

ところで、このような“主体的な学びを育てる空間”に関わる初年次教育の具体的な工夫に関しては、すでにいくつかの報告が行われている。例えば、井上・林（2018）は、学生の主体性を伸ばすことを目的に、授業の運営責任の大半を教員から学生 TA（Teaching Assistant）に移譲し、基礎学力講座の充実に向けた取り組みを報告している。また、吉澤（2014）は、初年次教育のシステムを全学的レベルで設計し、運用する必要性を指摘し、「初年次教育を学部・学科ごとに運用すると、各専門分野への導入教育的要素が強くなってしまふ恐れがある。（中略）教員間に初年次教育の意義について、認識を共有する必要がある」と述べている。

本学部の演習 IA では学科混合クラス制を採用し、両学科の教員がクラスを担当していることから、初年次教育を効果的に行える体制が整っていると言えるが、1年生が先輩からのサポートが得られる環境を設定することは、大学生活への適応や動機づけを高めることを通して、初年時教育の効果をさらに高めることが期待できよう。

ここまで、大学のカリキュラムにおける初年次教育の重要性を述べてきたが、大学生の心理的発達段階から考えてもその必要性が伺える。この時期は、“同一性対役割の混乱”の時期であり（エリクソン、1977）、自分がどのような生き方、役割、価値観で生きていくかが定まっていく時期である反面、人生を選び取っていく難しさに迷う時期でもある。人生における様々な選択を自分の意思で決定し、その選択結果を自分の人生として受容できることが大切である。多くの選択肢の中から一つを選び取るにはひとまず他を捨てる必要があり、ここで主体性が重要な役割を果たす。したがって、大学生の成長を考える場合、認知的・知的な成長だけでなく、価値観や態度、主体性を育むことを意図した初年次教育システムを構築する必要があるだろう。

文 献

- エリクソン：仁科弥生訳（1977）幼児期と社会Ⅰ．みすず書房：東京，pp336-339．〈Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. Norton.〉
- 井上聡・林紀行（2018）TAとの協働による初年次教育プログラムの改善：基礎学力向上への取り組み．環太平洋大学研究紀要，12: 29-35.
- 川喜田二郎（1967）発想法：創造性開発のために．中央公論新社：東京．
- Kuh, G. D. (2001) Assessing what really matters to student learning: Inside the national survey of student engagement. *Change*, 33 (3) : 10-17, 66.
- 文部科学省高等教育局（2017）平成27年度の大学における教育内容改革状況について：概要，文部科学省，http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf，（参照日2019年2月8日）
- 小方直幸（2008）学生エンゲージメントと大学教育のアウトカム．高等教育研究，11: 45-64.
- 山田剛史（2016）大学教育と学生エンゲージメント：第1回学生エンゲージメントとは，河合塾 Kei-Net：Guideline 4・5月号，<https://www.keinet.ne.jp/gl/16/0405/04eng0405.pdf>，（参照日2019年2月8日）
- 山田剛史（2018）大学生教育の質転換と学生エンゲージメント．名古屋高等教育研究，18：156-176.
- やまだようこ・家島明彦・塚本朱里（2007）ナラティブ研究の基礎実習．やまだ ようこ編，質的心理学の方法：語りをきく．新曜社：東京，pp.206-222.
- 吉澤剛士（2014）大学における初年次教育の可能性について．聖学院大学論叢，27（1）：101-112.

附 記

本研究は，人間健康学部中央研究費の助成を受けて実施されました。

(2019.4.17. 受理)